

📖 特集 新学習指導要領：新しい授業を目指して

—高校の授業はこう変わる—

英語による授業「教える」から「学ばせる」へ



北海道札幌国際情報高等学校

木村純一郎



●はじめに

私は英語教師であり、自分の仕事は、50分間教壇に立って高校生に英語を教えることである。

その観点から考えると、その50分の仕事が楽であるに越したことはない。しかしながら、何をもって楽とするか？ この辺が各教員間で意見の異なるところだろう。私の場合、不快を感じず、楽しく教えることができることが「楽」である。そのためには、準備の時間がかかることも厭わない。逆に、不快を感じながら楽しくない授業をすることは、大いに自分の精神を萎えさせ、「苦」となる。

昨年3月に新学習指導要領が告示され、「英語Ⅰ・Ⅱ」だったものが「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ」となり、名前の示すとおり「コミュニケーション能力」を養うことが、英語を学ぶ最大の目的であるということが強調された。「強調された」としたのは、現行の学習指導要領においても同じ事が謳われているからである。しかしながら、今回の「強調」の背景として、現学習指導要領が発表されて以後も「英語教育の現状」には大きな変化がなかったという現状分析があるものと思われる。今回の新指導要領にはさらに「…次のような活動を英語で行う」と記述があり、「英語は英語で教える」という基本方針が示されている。「目標」が明確に設定され、今回はさらにその「方法」までもが示された。英語教員の中にはこの動きを不快に、あるいはプレッシャーに感じる人も少なくないのかも知れない。なぜなら、われわれ英語教員の多くはこのような英語の授業を経験していないからである。

さて、私自身はこの動きをどう考えるか？

この動きは、「50分間教壇に立って英語を教える」という自分の仕事を「楽」にするのか「苦」にするのか？ ここではそれを考えていきたい。

私が勤務する北海道札幌国際情報高等学校は、平成13年度から3年間Super English High School (以下SEL-Hi) に指定された。SEL-Hiとしてのスタートにあたり、「コミュニケーション能力を養う」授業方法について様々な議論がなされたが、大きな柱として「英語で英語を教えること」を選択した。今でこそ、All Englishの授業など珍しくないが、当時としてはかなり思い切った挑戦であった。以後、今日に至るまで「英語を英語で」教え続けてきた。

「英語で英語を教えること」について考えていく前に、誰もが口にする疑問について私なりの考えを示しておきたい。その疑問とは、「英語を英語で教えて、受験実績に悪影響しないのか？」というものである。私の知る限りでは、「英語で英語を教えること」は、受験実績により影響を与えることはあっても、悪く影響することはない。これについては、多くのSEL-Hi高やその他の学校の結果がよく示している。そうでなければ、文科省も今回のような大胆な指示をすることはできなかったのではないかと？

もちろん「受験」を無視した授業をしていたわけではない。「英語で英語を教える」授業形態でも、受験で結果を出す指導は出来るのである。つまり「英語で英語を教える」と「受験指導」は、相反しないのだ。英語検定やTOEIC等とセンター試験を同じように考えるわけにはいかないが、これらの検定で好結果を出せる者は、センター試験でも同じような結果を出せるということもまた事実なのだ。「二兎を追う者は一兎をも得ず」という諺があるが、「二兎を追わぬ者は二兎を得ず」とも、また言えるのではないかと？

以上、前置きが長くなってしまったが、いよいよ本論に入りたい。

●授業が面白くなる

「英語で英語を教える」授業においては、授業自体がより「面白い」ものになる。いや、面白いものにせざるを得なくなるのだ。「訳」という従来の授業の多くの部分を占めていたものが無くなることによって、教師は生徒の注意を引き付け続けるために、別な方法を模索せざるを得なくなる。そのことによって、教師は自分自身の授業を組み立て直すことを余儀なくされるのだ。また、自分が英語で表現することを生徒らに分からせるためにも工夫が必要となる。例えば、Crown English I の Lesson 2, Section 1 の最初の部分

I went to America for the first time when I was sixteen. Nowadays many young people go abroad; things have changed a lot since I was a boy. To me America was a strange, far away land. However I had a dream to cross the ocean by ship and to hitch hike across America.

では、

I went to America for the first time when I was twenty-nine. Nowadays, many young people go abroad. I know some of you have already been abroad. Things have changed a lot since I was a boy. I took a plane for the first time when I was eighteen. I came to Sapporo, this city on a school field trip when I was in junior high, as I lived in a small town Ashoro in the eastern part of Hokkaido. To me, America was a strange and far, far away land, of course. However, I had a dream to cross the North American continent some day by motorcycle. (下線部は大げさに抑揚をつけて話す部分) などということ話し、同時に自分がオートバイで北米を横断した際の写真を見せる(全員から見えなくとも良い—authenticityを上げるための工夫に過ぎない)。

この話を用意するに当たってほとんど無意識に、私は話自体を面白くすることによって生徒に自分が話すことを理解させるよう留意している。そのためには、authenticity(私が北海道東部の足寄町出身であることも、29歳で初めてアメリカに行ったことも、オートバイで北米大陸を横断

したことも、全て事実である)や、実際のコンテキスト(生徒のなかに外国に行ったことがある者がいること、自分たちが札幌にいることなど)をうまく使うことを心がける。私の話が彼らにとって「聞く価値のあるもの」即ち meaningfulなものにする努力をするのである。これもまた「面白さ」の演出である。

「面白い」ことは、生徒の前に差し出すことさえできれば、後は生徒が勝手に学んでくれるのである。

●コミュニケーションが授業の中心になる

上記の活動の最大の目的は、生徒との「コミュニケーション」である。英語という「器」を使い「自分」という「中身」を入れて生徒に発信し、受信させようとしているのだ。生徒が私の話を楽しんで聞き、「へえ」とでも反応すれば、それは即ちコミュニケーションが成立したことを意味する。既に何度も触れたように、「英語で英語を教える」授業においては、面白さの演出が不可欠であり、それはよりよく生徒とコミュニケーションすることによってもっとも良く実現されると考える。

上記の Crown English I Lesson 2, Section 1 では、現在完了形が使われている。

Things have changed a lot.

これを「現在完了の4つの用法のどれだ? 完了か、継続か?」などと教えるのではなく、生徒をペアに分けて

Have you ever been abroad?

Have you already eaten your lunch?

How long have you lived in your town?

などの質問をお互いにさせることで現在完了の使い方を学ばせる。現在完了に関して言えば、「訳」をもっては教えられないものなので(Spring came. と Spring has come. は同じ訳になる)、特にこのような教え方は有効だと言えるだろう。このようにして一度導入した事項は、生徒との英語でのやりとりの中に取り入れていく。“Have you finished? — Yes, finished. / Not yet.”のやりとりが以後日常的に成されるようになるわけである。余談であるが、英語の先生方の中には、このやりとりを“Did you finish?”と過去形を用

いて行っている方が少なくない。これは従来の訳読式の限界を示す象徴的な現象である。

単語や表現を教える際にも訳は教えず、生徒とのコミュニケーションを通して意味を理解させる。例えば上記の文中に出てくる“cross”という動詞ならば、“I cross this classroom.”と言って教室を横断するとよい。上記の部分の直後に登場する“decision”という単語は、例えば

What should I eat this evening? Curry, ramen, or soba? I am very hungry, but I'm on a diet. Mmm...it is a tough decision. Mmm...O.K, I have decided. I made a decision. I will eat soba this evening, because I'm on a diet.

と言って説明する。もちろんdecide/decisionについて辞書を引かせなければならぬ。ただし、あくまで上記のような説明の後でなければならない。

訳をしていないだけで、教師が一方向的に教えていることに変わりはないではないか？ という向きもあろう。しかしながら、生徒に自然に「分きたい」と思わせ、楽しく「分からせる」ことが出来たならば、これはコミュニケーションと言えるのではないか？ 「対話」とは、必ずしも「双方が発話する」ことを意味しない。人間は言葉を使って頭の中でも「話す」（自己内対話）ものだからである。そもそも、授業そのものがコミュニケーションの一形態ではないか？

またまた余談であるが、最小限の物理的なアクションと一方向的な発話のみで、完全に聞き手の反応をコントロールしてコミュニケーションを成立させる芸を持つプロが存在する。落語家である。

●「量」が増える

「英語で英語を教える」場合には、日本語での指導に比べ、英語へのexposureが圧倒的に増える。“Listening”などと、あえて分けて考えなくても、生徒は常時、英語を聞くことになる。英語の授業において「プリント」「シャープペンシル」などという和製英語が使われることもなくなる。

テストについても量的な変化が生じる。「訳をする」という最も時間のかかる行為をさせない以上は、時間的な負荷を調整するために、設問の数

を増やさざるを得ない。さらに「授業を良く聞いていたかどうか」ではなく、「文章から必要な情報を得る能力」を試すことを意識すると、どうしてもセンター試験のような試験を作ることになる。私の場合は、定期考査では、B4の大きさでほぼ4枚分のものである。そのようなテストに慣れた結果として、生徒らはかつてほどセンター試験の量と時間的負荷を苦にしないようだ。センター試験もまた、現指導要領の趣旨に対応して変化してきた。同じ目的を持った指導法と試験の相性が良いのは当然と言える。

その気になれば、ハンドアウト上の言語もほとんどが英語にすることが可能であるし、校内放送を英語で行うことも出来る。教師側の想像力次第では、いくらでも生徒らが触れる英語の量を増やすことができる。何を学ぶにも「量」は重要である。「質」と「量」の積が「結果」だからである。

●「音」が重視されるようになる

これまで書いてきたように「英語で英語を教える」際には、「面白さ」を演出しなくてはならない。そこで、生徒がどのような活動を楽しんでいるかを考える。生徒は、英語の「音」が好きである。英語はキラリだと言う生徒も、音に関する活動は熱心に取り組むという者が少なくない。“One in a million” “Get it on” “Check it up”といった語句がどのように発音されるかを説明し、一緒に発音するだけでもかなり盛り上がる。口の前に紙をかざし“Power to the people”と発音し、紙を震わせて見せ、それを真似させると誰もが楽しそうにする。発音の上手な先生は、それだけで尊敬される。試しに、有名なスピーチや、映画のワンシーンなどをコピーさせて見ると良い。驚くほど熱心に取り組む生徒がいることに気付くはずだ。

これらのことを利用して授業に活かそうとすれば、当然、効果的に「音読」させることを考えることになる。その方法については多くの人が触れているので、ここでは詳述しないが、「上手に抑揚をつけて教科書本文が読めるようになったら、ある程度はその文を理解したと判断してよい」ということは、「英語で英語を教える」際に教師が知っておくべきポイントである。

「英語を英語で教える」場合には、音を重視し

た指導が極めて自然に行えるようになる。学んだことが、即、使われるようになる、あるいは常時使われているからである。

●Productionが重視される

言語を使ったコミュニケーションの結果として、生徒らが得たものは、それを彼らが消化して初めて意味を持つ。それを促すためには、彼らに「発信」させるのが効果的である。例えばCrown English I、Lesson 3は、人類の英知が文化遺産を消失の危機から救うという話であるが、生徒らの身の回りにある文化遺産がどのように保持されているか考えさせて見るとおもしろい。グループで討議させる方法もあるが、高校1年生では、多くの場合、英語で討議する力はまだ身につけていないであろうし、実際に発表させると非常に時間がかかる。私は、このような場合「ポスター・プレゼンテーション」を用いている。やり方は簡単、A3の紙を渡して「自分の好きな文化遺産を選んで、それを紹介するポスターを作れ、但し英語で」と言って宿題とすればよい。そして回収する際に、ごく短時間でそれらに対するコメントをつけ、良くできた作品には「This is great.」と言ってやる。そして、良くできたものも、そうでないものも全て教室の壁に掲示する。後は、生徒同士が勝手にお互いの作品を評価する。教員のコメントよりも、生徒同士の「へええ」とか「すげえな」という言葉が、彼らにとっては最大の評価になる。また、この活動を通して、彼らが英語で学んだ「文化遺産」についてさらに理解を深めることには疑いがない。

「発信」は、授業のあらゆる場面で意識される。先に触れたテキストの一文を使って、「I went to Tokyo for the first time when I was eight.」と言わせるのもまた、発信の一形態である。「英語で英語を教える」場合には、前述の様に生徒間、あるいは教師と生徒間で英語を使ってコミュニケーションする機会が増えるので、その際に「自分自身の言葉」を発信させることに腐心すべきである。当然、力がついてくれば、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート等の発信を含む活動を効率よく導入しやすくなる。ただし、これらの活動には時間がかかるので、あくまで基本は通常

の授業の中で「自分の言葉」を引き出すことにあると心得ておくべきだろう。

●おわりに

以上、「英語で英語を教えること」が、授業にどのような変化をもたらすかについて考えてきた。改めて振り返ってみると、「英語で英語を教えること」は、50分教壇に立って英語を教えるという私の仕事を、あるいは、より大変にしたかも知れないが、確実に「楽しく」した。論語に「子曰く、これを知るものはこれを好む者に如かず。これを好む者は、これを楽しむ者に如かず」という言葉がある。これは正に英語教育にぴたりと当てはまる。「これを楽しむ者」は「自ら学ぶ者－自律的学習者」を意味しないだろうか? 「自ら学ぶ者」には、over teachingは禁物である。学ぶ楽しみを削ぐからだ。一方で、彼らに対しては、「良質な経験」を与え続けることが求められる。これからの英語教員には、「教える」から「学ばせる」へと態度の転換が必要となる。

「楽しむ」者を増やすという点においては、「英語を英語で教える」ことには、「大変さ」を引き受けてなお、取り組む意味がある。

